

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

筆祭競介  
表紙 / しるすず

白翼天使

ホワイトウインド



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『白翼天使ホワイトウインド』  
『白翼天使ホワイトウインド2』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



白翼天使  
ホワイトウィンド

筆祭競介  
表紙 / しろすず

第1話	005
第2話	044

## 登場人物紹介

---

Characters

かざみ どうまい こ

**風御堂舞子**

変身ヒロイン・ホワイトウインドに変身する、元気で明るい性格の少女。普段は小柄なロリ体型だが、変身するとスタイルの良い大人の女性になる。

## 第1話

平日の夕方。

風御堂舞子は友達と三人で家路を歩いていった。

三人ともブレザー式の制服を着ている。

栗原女学院中等部の二年生である舞子は、その年齢にしては背の低いほうだった。そして一緒にいる友人二人はほのかに胸が膨らみ始めているのだが、彼女だけはその兆しが見えない。完全に発育が遅れている。

しかしスカートから伸びている両足はとても若々しく、なにより澁刺としたその明るい表情はとても健康的だった。

黒のショートヘアにキリッと引き締まった形のよい眉と合わせて、舞子のような少女をクボイッシュな女の子と呼ぶのだろう。ぱっちりと開いている瞳の力強さなどは、同年代の男子を遥かに凌駕するものだった。しかし決してギスギスした顔はしていない。幼い丸顔にちょこんと乗っている鼻などは、なんとも愛嬌があつて可愛らしい。

「昨日の翼様のニュース見た？」

「見た見た！　また怪人をやつつけたんだよね！」

「ああん！ 一度でいいから生で見てみたいわ〜」

「翼様が相手なら、私あげてもいい！」

友人二人が異様に盛り上がっているのは、突発的に発生する怪人を倒す謎の女性・ホワイトウインドについてであった。

背中に大きな白い翼を持ち華麗に空を舞いながら怪人を倒すことから、スポーツ新聞などではホワイトウインドの当て字として「白翼天使」と書かれるようになっていた。一時は「白翼様」と呼ばれていたが、今では更に短縮されて「翼様」と呼ばれている。

常に「様」付けで呼ばれているのは、その凛々しいルックスのためだろう。

「あげるって、なにをあげる気なの？」

異様に盛り上がっている友人二人とは対照的に、舞子は一人冷静にツツコミを入れた。

「お子ちゃまの舞子じゃ翼様の良さはわからないわよね〜」

「乙女心はとつてもミステリアスなのよ」

「……私も乙女なんですけど」

舞子がそう言うと、友人二人は顔を見合わせて笑い始めた。いかにも馬鹿にされたやり取りに、舞子はぶーつと頬を膨らませる。その表情を見て友人二人は更に爆笑する。

そんなたわいもないやり取りをしている時だった。

「あつ、メールだ」

舞子の携帯電話がメールの着信音を鳴らした。通学用の手提げ鞆から慌てて取り出す。チラッとサブディスプレイを見て一つ溜め息をついた。

「ゴメンっ。また急用ができちゃった」

舞子は両手を顔の前で合わせると、友人二人にペコンと頭を下げた。

「またあ？ 昨日もだったじゃない」

「昨日の埋め合わせで遊びに行くところだったのにい」

ぶーぶーと文句を言う友人に何度も謝り駆け出した。

背中から、この裏切り者、と非難の声が浴びせられるが仕方がない。

舞子は人通りのない路地裏に入ると携帯に届いたメールを開いた。

タイトルは、〴「買い物お願い」。

しかしそれは、〴「本部」からの、〴「緊急事態発生」の暗号だった。

じゃがいも三個、牛乳一パック、ネギ二束、卵十個……。

食材の種類と必要個数を書いてあるが全て暗号だ。

……市で怪人発生。

舞子は暗号文を読み解くと一度深呼吸してカッと瞳を見開いた。童顔が凜々しく引き締まる。

怪人とは——。

現代。昔とは比べものにならないほど日本は豊かになっている。

不況だ、リストラだ、増税だ、と景気の悪い話題ばかりがニュースで流れているが、餓えて死ぬ人間はほとんどいない。そして大半の国民が、江戸時代の殿様以上の生活をしている。

しかし――。

文化が成熟し豊かになればなるほど、人間は更に上を求め。

もつといい暮らしがしたい。もつと楽をしてお金を稼ぎたい。

しかしその欲望を満たせる人間はほとんどいない。

人が羨むような生活をしている人間でも、満たされない気持ちを常に持っている。

もつと、もつと、もつと……。

いつしかそれが怨念となり、恨みとなる。

昔の日本なら個人的な怨念が具現化し物の怪となる者は、生活水準がとてつもなく高い者たちに限られていた。皇族、貴族、武将や僧侶。

日々の生活に追われる名もなき一人の民が、物の怪になるほどの怨念を持つことはほとんどなかった。

しかし今の日本では、国民の誰が物の怪——怪人となってもおかしくない。そして怪人は物理的な軍事力では倒すのが非常に困難なものだった。除霊能力に優れた者でなければ



その任は務まらない。怪人退治は、国家レベルの重要案件であった。

「よし。ほんじゃあお仕事をしますか」

舞子は手に持っている携帯電話に、パスワードを一気に打ち込んだ。そしてディスプレイに、音声識別の画面が現れた直後に鋭く叫ぶ。

「変身！ ホワイトトウインド！」

その瞬間、全身が携帯ディスプレイから溢れ出た光りに包まれる。

幼い体格の頭身が急激に高くなり胸が大きく膨れていく。

ブレザー式の制服が光の中でかき消えてオールヌードになった次の瞬間、青と紫を基調色としたコスチュームに全身を包まれる。

顔には両目を隠すように半透明なバイザーと両耳をカバーする耳当てが装着される。上半身は密着式のパープルスーツ。腰から下は濃青色のスパッツと膝まである硬質なロングブーツ。背中には白い大きな翼が二枚折り畳まれている。寒色系のカラーで全身が統一されているために、白い翼の鮮やかさが際立っている。

舞子の幼かった丸顔が一気に大人びて、頬がほっそりとした玲瓏な美貌に変化していた。ショートカットだった黒髪は翼の付け根付近——肩甲骨まで伸びている。鼻もスツと高くなり、丸くぱっちりしていた瞳が切れ長のアーモンド形になっていた。

しかしその眼光の力強さだけは変りない。

そう。友人たちが、あげてもいい」とまで言っていた正義のヒロイン・白翼天使ホワイトウインドの正体は、彼女たちが、お子ちゃま」と言って笑っていた舞子であった。

そして『白翼天使ホワイトウインド』の活動は、日本政府が極秘に進めている国家プロジェクト——特殊有事対策計画の要でもあった。特殊有事」とはいうまでもなく怪人のことである。

——変身完了。

舞子は空を見上げると、地面を蹴って一気に天空高く飛び上がった。

背中の翼がバツと開き、目的地に向かって加速していく。

場所はラブホテル街だった。

カッブルばかりの華やかな路地に、一人だけ異彩を放っている男がいる。

中肉中背で虚ろな表情をした冴えない男だ。茶色のトレンチコートを着ており、帽子を深く被っていた。

道行く女性に「中で出させてくれえ」「ぶっかけさせてくれえ」と信じられない言葉を吐いて絡んでいる。しかし動きが愚鈍なために絡まれた人々は少し嫌な表情を見せるぐらいで、ほとんど無視して通り過ぎていた。実害はない。しかし場所が場所だけに、どんな形であれ声をかけられるのはおもしろくないだろう。とても迷惑だ。

「そこまでよ！」

空から凜とした声がこだまする。路行く人々が空を見上げた。

「うわっ！ ホワイトウインドだ!!」

「翼様よ！」

真つ赤な夕焼け空に、純白の大翼を広げて浮かんでいるホワイトウインド。

それはまさに天使の姿そのものだった。

幻想的なまでに美しく、そして神々しい。

それを見て鼻の下を伸ばすカップルの男を、連れの女は咎めなかった。それは女のほうも、その凛々しい姿にポーッと見惚れていたからだ。

天空からゆつくりと舞い降りていくる白翼天使の姿に、老若男女を問わず釘付けになっている。しかし——。

「つてことは、あの男って怪人なの!？」

ホワイトウインドの出現でにわかには沸騰していた雰囲気はその言葉で静まった。慌てて皆が男から遠のく。しかし完全に逃げ出さない。遠巻きから白翼天使と怪人を眺めている。

「中では出させてくれえ」

自分を倒しに現れた白翼の女戦士を前にしても、怪人の行動は変わらなかった。虚ろな表情をしたまま、瞳だけをギラギラさせて迫ってくる。

——うわっ。なんか嫌なタイプの怪人だ。

舞子はすぐに怪人解析プログラムをスタートさせた。バイザーの内側にあるディスプレイの片隅でプログラムが走り出す。怪人を完全に消滅させるためには、その怪人がなんで発生したのか知る必要があるからだ。

「お前凄いい美人だな。お前みたいないい女に中出しできればサイコーだ」

——しかも、凄いいこと言ってるよ……。

舞子はキュッと両眉を寄せると、片手をサッと背中にしほワイトウインンドのシンボルである白羽根を一枚引き抜いた。手にしている羽根の先端は鋭く尖り、まるでダーツの矢のようになっている。

「ウイングアロー！」

舞子はそれを異常に顔色の悪い怪人目掛けて投げつけた。

シュン！

放たれた羽根手裏剣は白い閃光となって、慌てて逃げようとした怪人の背中に突き刺さる。

「ゲッ！」

怪人は痛みのおめき声を上げた。

そして反撃のつもりなのか、突然トレンチコートの中からサッカーボールほどの大きさ

に膨れたビニール袋を取り出し、それを投げつけてきた。しかしスピードが遅い。白翼天使はポーンと飛んでくる袋を簡単に避けた。キャッチしようと思えばキャッチできたが、殺傷能力のある爆発物の可能性があるのでそんな危険なマネはしない。

——なんか……、とてつもなく弱い怪人ね……。

あまりの歯応えのなさに一つ溜め息をついた。緩みそうになる気持ちを引き締めるために「——よしっ」と自分自身に気合を入れる。

舞子は一気に勝負を決めることにした。

力強く地面を蹴って、一瞬で空高く舞い上がる。

上空約三百メートル。この高さなら小石を落下させても立派な凶器になる。

舞子は地上で自分を見上げている怪人を、バイザーに内蔵されているセンサーでロックオンした。一度、深呼吸してキッと表情を引き締める。そして——。

「メテオストライクッつつつつつ!!」

舞子はそのまま怪人に向かって突進していった。

空から落下する物理的な重力エネルギーと、ホワイトウインドの加速力を合わせたそのスピードは音速すらも超えていた。愚鈍な怪人が避けられるわけがない。

ドガッ  
ツツツツツツツツ!!

白翼天使の両足を揃えた超高度&超高速ドロップキックが、怪人の胸元に炸裂する。

舞子は自分の胸を気色の悪い触手に嬲られる行為に、たまらない嫌悪感を感じていた。スーツ越しでもビクビクと脈打つ肉縄の生温かさが伝わってくる。そして胸元から漂ってくる生臭い精液の匂いに、その美貌を歪ませ続けていた。

——それなのに……。なんでこんなに……。

執拗な乳房責めのために、スーツの中で自分の乳首が硬くなっていることを自覚していた。突発的にひくんとひくんと身体が痙攣する。背筋に未知の感覚が走っていた。

「か、感じてるのか？ 俺のザーメンで感じてるのか？」

怪人は暗い瞳に危ない光を宿しながら問いかけてくる。興奮のためか声の上擦っていた。「……くっ。そんなわけ、あるわけないでしょ……」

舞子は歯を喰いしぼり、睨みつけることでそれに答えた。

しかし怪人は怯まない。夢中でホワイトウインドの乳房を弄んでいる。唯一の救いは強化コスチュームのため、塗り込められている汚液が素肌まで染みこんでこないことだった。しかしその感触は明確に伝わってくる。この強化スーツは戦闘時に五感を鈍らせないようにと、素肌とほとんど同じ感度で装着することができるからだ。それが今回は仇になっていた。興奮した触手の脈動がビクビクと伝わってくる。

ぬちゆる。ぐちゆるちゆ。ヌルルルッ。

怪人の触手は激しく動き、硬度をどんどん増していく。硬くしこったホワイトウインド

の乳首をスーツ越しに執拗に擦り続けている。その動きは小刻みでとても激しかった。

「ああっ、イッ、イクっ！ おっぱいでえ！ 女のおっぱいでイッちまうっ！」

怪人はそううめくと、小刻みに擦りつけていた触手の動きを止めた。

どびゅっ！ どくぐっ！ どぶどぶぷっ！

完全に胸と密着した状態のために、射精の脈動がリアルに伝わってくる。剛直した肉棒の中を、粘塊がどぶどぶと駆け抜けているのがわかる。

舞子はたまらず自分の胸に視線を下ろした。

—— 凄く濃いのが、……あんなに一杯出てる……。

豊かに盛り上がったバストの頂点部分に、二本の触手がめり込んでいた。そして肉先に装着されているコンドームの中に、大量の白濁液がどぶどぶと溜まっていく。

直接触れていないのに、その熱さが乳首にジンジンと響いてくる。

「……っ、っはっ……」

思わず漏らした声は、喘ぎ声となんら変らなかつた。

「次は直接……ぶっかけてやる」

怪人はそう言うのと、ホワイトウインドのコスチュームを破こうとし始めた。

しかしそれは現代科学の粋を集めて開発された強化スーツだ。精液の怨念で発生した怪人程度では、このスーツを破るだけの力はなかつた。

「むっ、無駄よ、諦めな……さい。ふあっ……このスーツは……そんな触手で……ひっかいたくらいじゃ……くっう……絶対破れないわ」

ホワイトウインドはうつすら頬を桜色に染めたまま忠告した。スーツを破ろうとしている触手の動きが結果的に激しい愛撫となっている。しかし、怪人は諦めない。ホワイトウインドの言葉に、逆にハツとした表情をする。なにかに気付いたようだ。

「じゃあ……これではどうだ？」

触手を一本、背中に回した。うぐっ、とうめきニヤリと口元を斜めになると、その触手を前に回した。コンドームの付いているその肉先が持つていたのは、鋭い切っ先と白い羽根で構成された武器——ウイングアローだった。

確かにホワイトウインドの強化スーツは現代科学の粋を集めて造られている。しかし、その武器であるウイングアローもまたそれは同じであった。

怪人はその鋭い切っ先を、思う存分触手で蹂躪したホワイトウインドの胸に伸ばした。先端を胸の谷間部分に押し当てる。ちょうど二つの乳房の盛り上がりの中部分だ。スーツ生地はパンパンに張り詰めているが、その真下には空間ができています。もしここで怪人が全力でウイングアローを突き出せば舞子の命も危ない。

しかし怪人の目的は命を奪うことではない。敵はチラッと白翼天使の表情を窺ってから、ウイングアローの切っ先をクツと下に引いた。



シユン。

その切っ先が離れた一瞬後、コスチュームの胸部が縦にスツと割れる。

「きゃっ！」

密閉されていた肌が外気に触れてヒヤっとした。変身時に通常の衣類は全て転送されてスーツの中は素肌である。そのため豊かに実ったバストの谷間が、引き裂かれたスーツの間から剥き出しになる。

ぴっちりと密閉されていた胸肉が、その拘束が緩んだためにたふんと揺れて僅かにその谷間の深さを変えた。なんとも煽情的な乳肉の動きである。

晒された肌は眩しいほど白い。青と紫をベースにしたスーツを着ているために、背中の翼と同じく、その白さがより際立っている。

そして怪人との激しい戦闘と、バスト蹂躪の余韻のためにうつつすらと汗をかいていた。乳肌の肌理が細かいためにその汗は珠となり、豊かな球面の上に載っている。

怪人がその美しさに見入っていたのは一瞬だった。

先ほどスーツ越しに乳首を擦りながら射精してたぶたぶになっているコンドームを取り出すと、その剥き出しになった胸の谷間の上で傾ける。

「……………くっうっ……………」

生温かい粘液が直接素肌に触れる。そのおぞましさに舞子は思わず声を漏らした。

スーツ越しの時にはわからなかった、粘りやヌルつきがはつきりとわかる。それが自分の素肌の上にどろりとへばりつく。素肌から伝わってくるザーメンの生温かさが、漂い続けていく牡臭をより強調させる。

匂いも感触もその温度までもが、舞子に嫌悪感しか感じさせない。

こんなものに触れたくない。早く拭い去ってしまいたい。

「ああ……。とうとう……とうとう直接女に俺のザーメンが……」

怪人が感極まった口調でそれだけ言うと、まだ射精していないコンドーム付きの触手を一本伸ばして、その胸の谷間にヌルりと潜り込ませた。

「ひぐっ！ いやああつ、そんな汚いの塗りつけないでえっ！」

その気色の悪い感触に、舞子は思ったままを口にしていた。ビグッと全身を硬直させる。触手はそのままヌルヌルと這い動き、搾り立てのザーメンをホワイトウインドの生乳に塗り込んでくる。生温かい粘液をドクドクと獣欲に脈打つ肉縄を使って擦りつけられる感触にゾゾッと寒気が走る。そして精液によって摩擦系数が極端に低くなったため、乳房の揺れ方もより淫らになっていた。張り詰めた乳肌がテカテカと濡れ光り、これ以上ないほど淫靡な光景となっている。

「つ、次は……」

二つの乳房を弄びながら怪人の視線が向いたのは、ホワイトウインドの股間だった。

——ま、まさか……。

胸を犯された時以上の悪寒が背筋を駆け抜ける。

怪人は思い詰めた目をしたまま、手にしているウイングアローをホワイトウインドの股間に伸ばしてきた。舞子は必死でもがく。怪人の目的があまりに明確だったからだ。

——今度はアソコを犯す気だっ！

しかしホワイトウインドの全身に絡まる触手の群れは、その拘束力をまるで緩めない。怪人の視線から股間を逸らそうと全力で横に捻った腰を、両膝を開くようにして強引に正面を向かせられてしまう。舞子は、肩幅よりもやや両足を開いた状態で下半身を固定されてしまった。

怪人は挿んだ羽根手裏剣を、その開いた股間に伸ばしてきた。ぴちつと密着したスーツに鋭い突起が接触する。その硬質な感触で舞子はビクッと全身を震わせた。最も敏感な部分で、その鋭い形状を把握する。

怪人が胸の時と同じように、股間のスーツを引っかけるようにしてかき切った。

「み、見るな！ この変態怪人！」

舞子は顔を真っ赤にして怪人を罵倒した。姿はホワイトウインドのままだが、口調が少女時の舞子と同じになっている。

胸と同様、下半身にも下着を付けていない。スーツの下はそのまま女の秘部である。胸

の成熟具合に比べて、かなり未発達な陰毛がチヨロツと覗く。そしてやや肉の薄い大陰唇が丸見えとなった。

——やだっ。こんなバケモノにアソコを見られてる。

舞子の胸中は恥ずかしさで一杯だった。あまりの羞恥心にうなじのあたりがカツと火照る。なんとか現状から脱出し股間を隠そうとするのだが、どうしても触手から逃れることができなかった。戦闘時にはあれほど軟弱だった怪人が、陵辱時にはホワイトウインドのパワーを遥かに凌駕している。

「こ、これが女の生マ○コ……」

まさに張り付くような視線で怪人に女の秘部を凝視され、舞子は顔だけではなく耳の先まで真っ赤になった。そのため剥き出しにされている股間の白肌までもがほんのりと赤く染まり、ますます牡欲をかきたてる色合いとなっていく。

「ああっ。ヤレル。生の女と初めてセックスできる」

ハアハアと射精時並に息を乱しながら、怪人が触手を伸ばしてきた。

コンドームの装着されている赤黒い肉塊は血管がビクビクと浮き上がり、一見しただけでその剛直具合が推測できる。それがゆっくりと自分の股間に伸びてきた。

舞子は当然まだ性交の経験などない。

それが今、淫臭漂う触手のバケモノに女性器を犯されようとしている。

いやだ。絶対いやだ。しかし——。  
ぷちやつ。

コンドームが付いた触手の先端が、女の入り口に密着した。

「やめろおおつつつ！ 嫌っ！ この変態怪人っ！ 放せっ！ はなせえつつつ！」  
女体で最も敏感な部分から、触手の生温かさがじんわりと響いてくる。コンドームが付けられているため、ぬるつく体液や肉肌が直接触れる感触はない。しかし獣欲にドクドクと脈打ち興奮しきっていることは、パンパンに充血し剛直している触手の感触でよくわかった。極薄のゴム越しに怪人の牡欲の脈動をはつきりと感じる。

「こんなイイ女相手に初めてができて……ああ……」

怪人は何故か泣きそうな表情をしていた。

どうやらこの怪人は童貞のようだ。女に触れられなかった精液の怨念で構成されている怪人なのだから、それも当然だった。

ホワイトウインドは既に暴れ疲れ、今では犯されようとしている自分の股間を見ないようになぐったりと上を向いていた。まるで首の筋力がなくなったかのように顎を反らしている。

——こんなのが私の初めてなんて……。

舞子も年頃の女の子だ。自分が将来迎えるであろう初体験には、それなりに甘い幻想を

持っていた。それがよりもよってこんな触手のバケモノ相手に汚されようとしている。甘い期待感など欠片もない。

舞子の胸中は未知の経験に対する恐怖と、倒すべき怪人相手に初体験を行なう屈辱感で一杯になっていた。そしてそれは、舞子の瞳が泣く直前のように細まった直後だった。グッ。

股間に密着していた触手が侵入を開始した。

グヌヌヌッ。

執拗な乳房責めで潤み始めていた女壺に、興奮しきった触手がわけ入ってくる。

ホワイトウインドはビグッと背筋を反らし、瞑りそうになっていた瞳を大きく見開いた。触手の群れにがちり固定されている背中の白翼もビグンビグンと痙攣し、強引に大きく開こうとしている。

「ひぐうっ！ やっ、だめっ……ぐっ……くふうっうううっん！」

自分の体内に怪人の肉塊が入り込んでくる違和感に耐えきれず、舞子は大きく仰け反った。動物の舌のように蠢き、男根と同じような硬度を持つ触手の感触に膣壁が驚き収縮する。しかし痛くはない。ホワイトウインドになっている場合、肉体全てが変換されて処女膜はないようだ。だがこれが舞子にとっての初体験であることに代わりはない。そしてその相手が触手のバケモノだということも紛れもない事実であった。

強烈な嫌悪感が心を満たす。切れ長の瞳にはいつの間にか大粒の悔し涙が溜まっていた。じゅぽつ。ぐちゅちゅ。ぐぼぐぼぽつ。

女体の最深部——子宮まで触手は侵入し、その入り口に向かってコンドームの付いた肉先をごちんごちんとぶち当てていく。長い触手は波打つように蠢きながら、挿入行為を貪欲に続ける。その激しさに比例して女戦士の股間からは愛液が流れ続けていた。

嫌で嫌でたまらない自分の気持ちと、成熟した大人の女の肉体が示す反応のギャップに舞子は強烈な違和感を感じていた。

——嫌なのにつ、こんなに嫌なのにつ……なんなのこれは!!

何度も濃厚なセックスを経験し、性感が開発されている女体でなければ味わえない肉悦を、触手のバケモノに犯されながら感じていた。現在の肉体が舞子本来の少女体ではなく、成熟したホワイトウインドの女体のためだ。

熱くて太い触手にじゅぽじゅぽと擦られる膈壁では、凄まじい快感が発生していた。それはまるで稲妻のように、ビリビリと背筋を駆け抜けて眉間にまで突き抜けていく。

「つくはあつ！ なにつこれつ……硬いのが……うぐつつ……ウネウネしてて、あつ、あふつあぁ……ひぐうううつ！」

舞子の漏らす声は、明らかに喘ぎ声となっていた。

ホワイトウインドのよく発達した女体は、身の毛もよだつ怪人の触手に対しても牝の快

感を発生させる。陵辱されている女性器は大量の愛液を分泌し、膣壁は侵入している触手を締め付け続ける。触手の突入に合わせて細い顎を躍らせながら、抑えようとしても抑えきれない甘い喘ぎ声を発してしまう。

「ああっ、これがセックスかあ……、さ、最高だあ……」

怪人は触手の突入を続けながら、うつとりと目を細めて至福の表情をしていた。その視線はホワイトウインドの美貌と胸元に向けられている。剥き出しになりザーメンを塗り込められている乳房の谷間は、スーツの中でだぶだぶと揺れ続け、ますます怪人の牡欲を誘っていた。

喘ぐホワイトウインドの美貌を凝視しながら、その下で弾んでいる乳房に触手が伸びる。乳脂肪の柔らかかな盛り上がり、伸ばした触手で包むように絞りあげていく。根元から段々這い上がり、最後には頂点の肉豆までもコンドームの付いた肉先でギュッと包み込む。

「くっあつ、こんなのって……。ああっ……。き、気持ち悪いのにいいつつつ!!」

——なんでこんなに気持ちいいのっ！

触手の熱い感触に甘い吐息が漏れて、胸元から立ち昇ってくるザーメンの淫臭にうなじのあたりがゾクゾクと粟立つ。膣内に侵入している触手の激しい動きに、火照った肉体が牝の反応をしてしまう。無意識に腰がクイクイッと左右に動いているのは、怪人から逃れるためではなく、よく感じるポイントに触手を導くためだった。突入の激しさに比例して



大量の愛液が溢れ出し、陵辱者の肉塊をますます喜ばせてしまう。

白翼天使ホワイトウインドは、精液の怨念で発生した怪人の触手で達そうとしていた。自分が倒し浄化するべき相手に責められイキそうになっている。

「ああっ、イクっ！ イキそうだ！」

童貞怪人の限界も早かった。陵辱行為を始めてからものの数秒だ。

「ゆ、許さないからあつっ！ こんなことして絶対許さないんだからあつっつっつっ！」

舞子は激しく首を横に振り、必死に叫んだ。しかし怪人の突入は弱まらない。

膣内を激しく擦る肉管は、金属のような硬度にまで剛直していた。浮き出ている血管の脈動もドクドクと激しい。明らかに限界に達しようとしている。まるで性の経験がない舞子でもそれがわかるほどだった。

「ああっイクっ！」

怪人が唇を窄めてウツとうめいて動きを止めた。その直後、股間に打ち込まれ波打つように突入を繰り返していた触手の動きも硬直した。

ドグッ！ ドピュピッ！ ドクドググッ！

舞子の最深部までがつちりと打ち込まれている肉塊が、物凄い勢いでザーメンを噴出させていく。乳房を絞りあげている触手も牡の排泄を同時に開始した。肉先部分で乳首を包むようにギュッと丸まっていたために、ザーメンがコンドームの中に吐き出されたことに

より更に乳首が圧迫される。

「ひゃうんっ！ なっ中で出てる！ あくう、おっぱいがあ、乳首がきついよおっ！」  
 膣内と乳首で爆発している灼熱の精液噴出に、白翼天使は大きく仰け反り絶叫していた。怪人の脈動に合わせて脳裏が真っ白になり、今まで感じたことがない快感が全身を駆け巡る。極薄のコンドーム越しに獣欲の爆発を浴びて、脳裏にもその灼熱感と同じような熱く激しい性の閃光が瞬いていた。

——これが……イクッて感覚!?

そう思った直後には、まともな思考を全て吹き飛ばすような官能の大波に、全身が飲み込まれていた。

「ああああああああつ！ イクっ！ イクううううつつつつつ!!」

細い顎を大きく仰け反らせホワイトウインドは叫び続けた。突発的に全身をビクビクと痙攣させながら、触手に拘束されている両膝がガクガクと揺れて崩れそうになる。凜々しい美貌が肉悦に緩む。

舞子はイッていた。

初めて体験する性の絶頂感に涙と涎を垂れ流して叫び続ける。何も考えられない。膣内で脈動し続ける触手の熱さと硬さに全感覚が塗り潰されていた。

激しい絶頂感が過ぎると、甘い余韻に包まれた。全身が気だるく頭の中がポーツとして

いる。仰け反らせていた顎をカクンと前に戻す。

パチン。パチン。

絶頂の余韻にぐったりしているとゴムが爆ぜるような音が聞こえてきた。閉じていた瞳を開くと、怪人が射精した触手のコンドームを取り外している。

「はあはあ。最高だった……」

怪人はそう呟くと、ザーメンのたつぷり詰まったコンドームを、再度剥き出しになっているホワイトウインドの胸の谷間に垂らした。

既に精液を全面に塗り込められて乳肌がテカテカと濡れ光っているために、再度振りかけられた精液は乳肌に止まらず、そのまま粘っこい跡を残しながらヌルヌルと乳房の上を滑っていった。スーツの隙間から密閉されている腹部に流れ落ちていく。

「——あぐくうっ……スーツの中があっ……ぬるぬるだよお……」

イカされた余韻でぐったりしていたホワイトウインドの言葉には、性的絶頂を知る前の凛々しい力強さはなかった。

怪人は触手を伸ばし引き裂いた胸の谷間からその肉先を侵入させる。くびれた腰にピツタリとフィットしている紫色のスーツが管状に盛り上がった。そのままズルズルと蠢き、コンドームから垂らしたザーメンを白翼天使の引き締まった腹筋や腰周りに塗り込んでいく。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**